

加賀野菜

金沢春菊

栽培マニュアル



加賀野菜「金沢春菊」栽培マニュアル
発行 平成31年3月
発行元 金沢市
監修 西本 明弘
編集 金沢市農業センター
金沢市下安原町東1477
電話 (076) 249-2744
FAX (076) 249-4470



【金沢春菊】

科名 キク科

原産地 地中海沿岸

産地 市内全域

栽培の歴史

金沢では江戸時代から栽培が始まったと言われている。かつては三馬地区など市街地での栽培が盛んであったが、現在では市内各地で栽培されている。また、以前は露地栽培が主であったが、現在はハウス栽培が主となっている。



特性等

発芽適温・生育適温ともに15〜20度で、冷涼な気候を好む。排水のよい土壌で、pH6.0〜6.5が適する。土壌の適応性は広いが、浅根性で乾燥に弱い。そのため、保水性のある砂壤土〜壤土が適する。

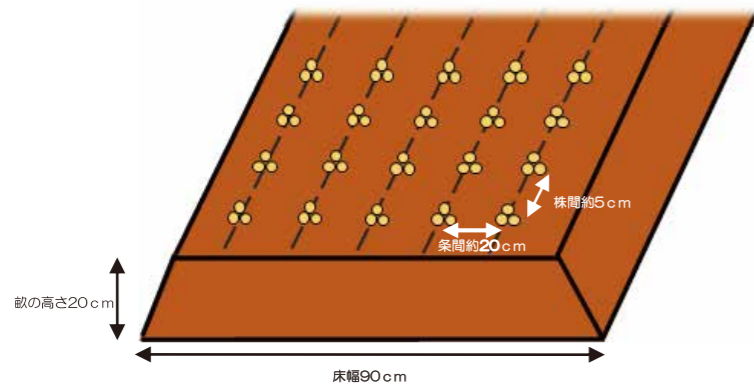


1 播種

【播種までの準備】

- ・ 播種の1週間前までに基肥を全面施用し、耕起、畝立てを行う。
- ・ 排水不良地では病気が発生しやすいため、20〜25cmの高畝とする。

【畝作り(例)】



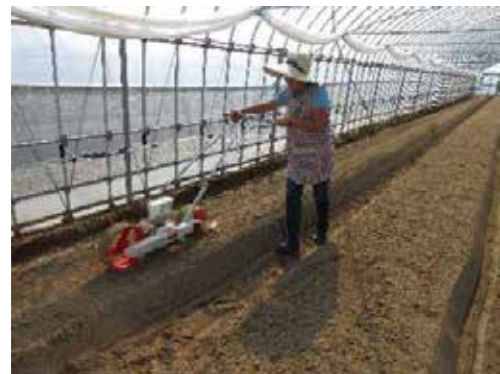
【施肥設計(例)】

(単位: kg/10a)

肥料名	基肥	追肥	成分量
苦土石灰	120		N16.0 P12.4 K14.8
粒状固形30号	100		
くみあい液肥2号		20×3回	

【播種】

- ・ 播種は、8月中旬以降から12月上旬頃まで順次行う。
- ・ 播種機を使い、株間約5cm、条間約20cmの5〜6条植えとする。
- ・ 春菊の発芽率は50%程度なので、1か所に3〜5粒入るよう播種機を調整する。
- ・ 好光性種子のため、覆土は薄めにして、軽く鎮圧を行う。
- ・ 播種後3〜4日で発芽する。
- ・ 発芽が揃う頃までは、表土を乾燥させすぎないように、こまめに灌水を行う。
- ・ 雑草対策として、播種直後に除草剤を散布することが望ましい。
- ・ セルトレイやペーパーポットを使用し、育苗期間を1か月程度設け、定植を行う方法もある。



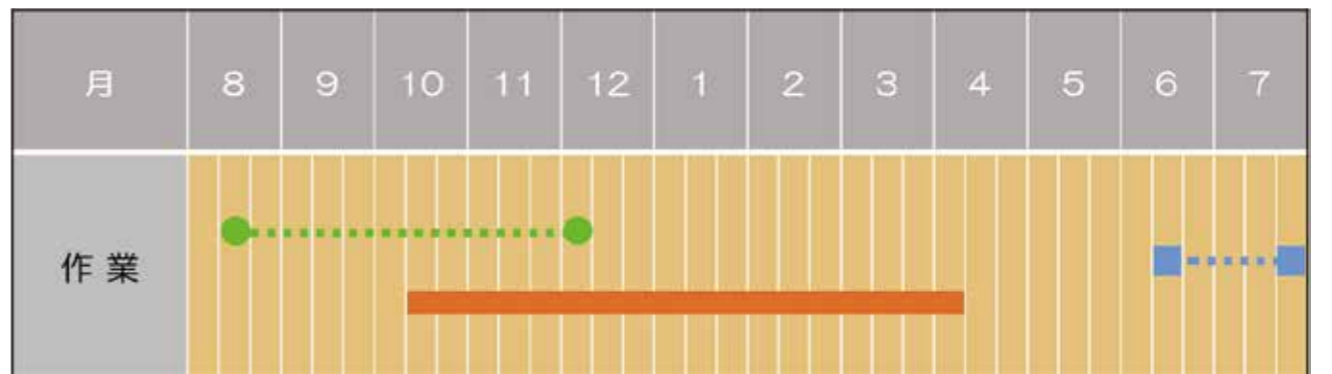
播種機による播種



発芽の様子(播種後3日目)

栽培カレンダー

● : 播種 ■ : 収穫 ■ : 採種



2 間引き

- ・ 播種から収穫までに、計3回間引きを行う。
- ・ 生育不良株等があれば、除去する。
- ・ 間引きが不十分で、株が混み合ったまま生育が進むと、炭そ病等の発生につながるため、徹底して間引きを行う。



間引き作業



間引き2回目終了後

【間引きの時期（株間5cm：5粒播種の場合）】

間引きの時期	内容	
1回目	本葉1～2枚頃	込み合った箇所中心
2回目	本葉4～5枚頃	1か所で2株程度にする
3回目	草丈5cm頃	株間10～15cm

間引きのポイント

- 間引く株の目安
 - ・ 虫食いや病気のあるもの
 - ・ 子葉が無いもの、形が悪いもの
 - ・ 軟弱徒長をしているもの
 - ・ 圃場全体の中で、生育が極端に早いものや遅いもの

3 追肥

- ・ 栽培期間中、葉色が淡くなれば追肥を行う。（収穫までに3回が目安）
- ・ 液肥は、200～300倍に希釈して使用する。
- ・ 固形肥料で追肥する場合は、肥料が茎葉に直接付着すると葉焼けの原因になるので、確認しながら行う。
- ・ 追肥は、葉焼け防止のため日中の高温時を避け、午前中または夕方に行う。

4 収穫

- ・ 草丈が18cm前後になったら、株元から収穫する。
- ・ 収穫は、萎れを防ぐため、午前中に行う。
- ・ 夜温が氷点下になることが予想される場合は、施設内で移動式簡易暖房機を焚くなどし、葉の凍結を防ぐ。



適期を迎えた株から収穫



萎れを防ぐため、発砲スチロールの箱を使用

5 調整・出荷

- ・ 子葉や傷んだ葉、腐敗した葉は取り除く。
- ・ 抽だいたした株は出荷できないため、調整時に確認する。
- ・ 根部を切り、土の付着した部分は軽く水で洗い流し、計量する。

・ 1袋あたりの重量は、150g。余目を含め、160g以上とし、出荷箱に1箱当たり15袋を縦に詰める。



根部を切り、土等が付いていないかチェックする



出荷袋の重量2gを加算し、160gとなるよう計量



出荷袋にはプラスチック製の下敷きに包んで入れる

【JA金沢中央野菜生産部会 金沢春菊出荷規格（参考）】

階級区分	葉茎の長さ	1袋の重量
レギュラー	18cm前後	160g以上 (風袋込みで160g以上とする)
S	10cm未満	

※ 等級は「秀」のみ

出荷調整時のポイント

- ・ 湿気が多いと出荷後の腐りに繋がるため、水切りを徹底する。
- ・ 調整場所の温度が高いと、萎れを助長させる恐れがあるため、室温は10℃前後とする。

6 採種

【採種場所の設置】

- ・3月中旬頃に、親株を選抜し、採種圃場に移植する。
- ・金沢春菊の形質にそぐわない株（葉の切れ込みが深い等）は親株としない。定植後に確認した際には抜き取る。
- ・排水性の悪い圃場は高畝にして定植する。
- ・株が小さいうちは寒冷紗で被覆を行い、虫害や強い日差しを防ぐ。
- ・風による倒伏の恐れがある場合は、フラワーネットを張り、生育に合わせてネットを上げていく。



開花の様子

【受粉】

- ・交配は虫媒によって行われ、5月下旬頃に開花盛期を迎える。
- ・自分で受粉作業を行う場合は、筆や綿棒を使用し、咲いて間もない花の表面をなでる。
- ・受粉作業は、花粉が新鮮で受粉能力が高い、晴れた日の午前中に行う。
- ・周辺の他のキク科作物との交雑を避けるため、開花前までにタンポポやセイタカアワダチソウ等の雑草の抜き取りや、寒冷紗を掛けるなどの対策を行う。

【採種】

- ・6月中旬以降、完熟した種を手で摘み取り、必要数量を確保する。
- ・とうみにかけた後、ビンなどの密封性に優れた容器に入れて、冷蔵庫等で保管する（通常で2〜3年は種の保存が可能）。
- ・保存適温は5度前後。
- ・湿気を避けるため、乾燥材を使用する。



種子色が緑で、採種にはまだ早い状態



種子色が黒くなった頃が採種の目安



摘み取りの様子



とうみにかけ、重さ別に分けて保管する

採種のポイント

- ・花の小さいものは種が小さく、充実したものも少ないため、採種しない（種の直径2mm以下のものは極力保存しない）。
- ・採種後2〜3か月は、種子休眠して発芽率が低いいため、使用できない。



7 病害虫防除

【主な病害虫】

- ・日頃の管理、収穫と併せて生育状態や病害虫の発生状況を観察し、病害虫の早期発見と初期防除に努める。
- ・病害虫は、年によって程度の差はあるが、繰り返し発生するので、発生時期や防除実績を日誌等に記録し、翌年以降の防除に活かす。
- ・薬剤散布の際、同一成分の薬剤を連続して使用すると、効果が少ない、あるいは出ない場合があるため、薬剤をローテーションしながら使用する。
- ・収穫期間中の薬剤散布については、収穫までの日数を考慮した上で行う。
- ・農薬は「野菜類」または「しゅんぎく」の登録のあるものを使用する。
- ・農薬の使用にあたっては、最新情報を入力するとともに、ラベルの記載内容を必ず確認して使用する。
- ・農薬に関する最新情報は、農林水産省農業コーナーを参照。
URL: <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

防除のポイント

- ・連作すると、炭そ病等が発生しやすくなるため、4〜5作以上の連作は避ける。
- ・べと病、炭そ病は多湿条件下で多発することから、病害の予防のため、通風、排水を良くする。

病害虫名	主な症状等
炭そ病	<ul style="list-style-type: none"> ・葉では褐色の小斑が、また葉柄や茎では楕円形の斑点が発生する ・新芽部分に発生すると、株の生育が止まる 
べと病	<ul style="list-style-type: none"> ・葉の表面にうす黄色のぼやけた斑紋が、裏面に白色のかび（分生子）が生じる ・多発すると病斑は拡大し、葉は淡黄色になり、やがて枯死する ・病気の進行は早く、発生すると被害は大きい 
ヨトウムシ類 オオタバコガ	<ul style="list-style-type: none"> ・日中は土に隠れているが、夜間に出てきて葉の葉脈を残して食べる（ヨトウムシ類） ・株の芯部分を中心に葉を食い荒らし、株は虫の黒いふんで汚れる（オオタバコガ） 